

「主よ、信じます」

イザヤ書 第55章 1節～2節
マタイによる福音書 第9章 27節～31節

説教 岡村 恒牧師

「主よ、信じます」。(28節)この告白は、今も世界中の教会で繰り返し口にされています。主イエス・キリストがいったいどなたかを知った者が、主イエスによって与えられる救いの確かさを信じて、自分のこの身に、本当ならあり得ないはずの完全な救いが実現することを信じて告白しているのです。こう告白して、罪の赦しの洗礼を受けて、新しい人として生まれ変えられる奇跡が、今日もどこかで実現しています。

主イエスは、「わたしにそれができると信じるか」(28節)と二人にお尋ねになりました。あなたを罪と死、滅びから解放し、救いだすことができると信じるか、今ここにいる私たちにも問いかけておられます。

主イエスは病人をいやし、会堂司の娘を死から引き上げてよみがえらせました。目の見えない二人の人は、奇跡の現場に居たかも知れませんが、しかしこの二人は、ただ助けて欲しいと叫んでいた訳ではありませんでした。「ダビデの子よ」(27節)という叫びは、聖書(旧約聖書)に約束された救い主を呼ぶ時の呼び方です。救い主がおいでになる世の終わりの日、病人が癒され、歩けない人が踊り上がり、目の見えない人が見えるようになると約束されていました。この二人は、自分たちにも奇跡が起こることを信じて叫び続けたのです。

「わたしたちをあわれんで下さい」(27節)という叫び声は、主イエスのかたわらでしばしば耳にしてきた叫びです。主イエスが家に入ると、この二人は押しかけて来て、主イエスのみもとにまで迫ってきました。二人に主イエスは、「わたしにそれができると信じるか」と問われました。

奇跡を求めているのか、という問いではありませんでした。主イエスが、死人を死から引き上げたすぐ後に、この二人は主イエスの前に立たされ、「わたしにそれができると信じるか」と問われたのです。目が見えるようになることや、具体的な生活の問題が解決することを越えて、ただ神の目に留めていただき、神のみ心にかけ頂くこと、神に愛されていることを知ることこそ、なくてはならないことです。この日二人は、主イエスの問いによって、本当に必要なものが何かを示され、求めるように促されました。

聖書の言葉で「あわれみ」というのは、体の一番奥にある内臓に関わる言葉です。神が私た

ちをご覧になって、そのはらわたが激しく揺さぶられるような思いを抱いて下さる、という話です。神のあわれみとは、もうじっとしてられない神のお姿を言い表す言葉なのです。主イエスは救いを求める人を目にして、はらわたが揺さぶられてしまうのです。もうそのままで放置できない思いで一杯になるのです。神は、私たちが滅び去ることなど我慢できないお方です。繰り返し神に敵対し、神の言葉を捨てるような愚かな者でも、神ははらわたを揺さぶられるほどに愛し、命へと招かないではられないお方なのです。

主イエスに問いかけられた二人は、この問いによって招かれ、さらに主イエスに向かって全身全霊を投げ出すように導かれました。「主よ、信じます」(28節)と訳されている言葉は元々、『はい、主よ』という短い言葉です。もう何の希望もなく、喜びもないこの私を、主が今、死と滅びから救い出して下さることを信じる、とこの告白は言い表しています。

主イエスは二人の明確な答えを聞いて、すぐに手を伸ばして、二人の目をお開きになりました。主イエスは嵐を静め、悪霊を追い出し、歩けなかった人を立ち上がらせ、死んでいた娘を生き返らせました。主イエスは、全知全能の父なる神と等しいお方なのです。目の見えない人の目を開くことも、主イエスにはできないことなどではありませんでした。私を死から救い出して下さるお方だと信じる者に向かって、主イエスは今も、この日と同じ約束を聞かせて下さいます。「あなたがたの信仰どおり、あなたがたの身になるように」(29節)。

主イエスは、私たちのために地上に来て、私たちのために十字架に架けられました。父なる神がその身を震わせて私たちを愛し、私たちを死から命に移して下さいました。私たちの目を開いてこの事実を見せて下さり、二人の盲人たちのように、主イエスを信じて生きる者として私たちを歩ませて下さいます。

この二人が、喜びにあふれて踊り上がるように歩み始めた時、人々は主イエスがいったいどなたかを知り始めました。主イエスを信じて、目を開かれて踊り始める信仰者は、その存在そのものが主イエスを指差し、証しをする存在になります。こうして福音が宣べ伝えられ、神の国の伝道は進んでいくのです。

(記 岡村 恒)